

満洲日系高等教育研究機関と戦後同窓会に関する歴史社会学的考察

卒業生による戦後の活動および各同窓会における満洲記憶について

2020 年 12 月 11 日

法学研究科 韓美怡

論文要旨

満洲の高等教育機関では、多様な出自の学生、すなわち日本人、中国人(満系)、朝鮮人(当時は日本国籍)、台湾人(当時は日本国籍)、モンゴル系、白系ロシア人等々が同一の大学でともに学び、同一の学生寮でともに生活していた。日本敗戦後、日本人学生と教育機関の職員の引き揚げと共に、当初は善後処理という目的として創設された満洲高等教育機関の同窓会は、その後、日本社会で親睦の目的で活動を継続してきた。一方、満洲高等教育機関で学んだ日本以外の様々な出自の学生たちは、戦後、自らの国・地域に戻り、それぞれの社会においてさまざまな活動を展開し、そのなかで同窓と連絡を取り、さらに自らの社会ではエリートとして活躍していた。日本が他国と国交を樹立する際、戦後同窓会は、民間組織として国際的な技術交流活動や訪問活動などを通じて、日本と隣国の間に友情の架橋という役割を担った。特に日韓と日中の国交回復の前後には、同窓会で活躍していた同窓生たちが各領域で活躍する人物として大きな貢献を果してきた。

本論文の対象は、旧満洲国日系高等教育機関の戦後同窓会(以下、戦後同窓会という)である。戦後同窓会は、終戦前後に満洲に存在した日系高等教育機関の学生によって自発的に結成され、1940 年代後半から 1950 年代に設立された(建国大学同窓会:1953 年、旅順工科大学同窓会:1946 年)。戦後同窓会の組織と活動の特徴には、「歴史」と「記憶」の複雑な関係が反映されている。モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」とピエール・ノラの「記憶の場」の歴史社会学理論によると、歴史と記憶は常に対立する概念として理解されている。本論文では、戦後同窓会を同窓生の「満洲記憶」が生まれた場として位置付け、そこでの記憶のメカニズムを検討する。本論文の問題意識は、そのような変容や差異が生じた背景と、その差異が同窓会活動に与える影響を調査・分析することである。こうした分析は、さらに、現在の東アジアでも重要な問題となっている歴史認識の問題を考える上でも大きな示唆を与えるであろう。

1972 年 9 月の日中関係正常化ののち、日中間の交流は民間の分野でも盛んになっていた。その中で、満洲日系高等教育研究機関の戦後同窓会も非常に重要な役割を果たした。しかし中国系卒業生たちは日系の同窓会に参加する一方で、自ら書いた回想録の中では、満洲日系高等教育研究機関における反満抗日運動を重視している。他方、日本人卒業生も満洲の記憶について叙述する時、大方は、他民族の同窓と共に生活した経験よりも日系同窓や教授たちの思い出、さらに戦後の引揚についての内容が多くを占めていた。これらの資料は、同じ場所で生活した様々な出自の卒業生の個々の「満洲記憶」を反映している。本稿の問題意識は、そのような差異が生じた背景、とその差異が同窓会活動に与える影響を調査することである。

本論文では、様々な出自の同窓生により書かれた回想文を分析し、個々の集団の「満洲記憶」を包括的に分析することを目指している。建国大学をはじめとする満洲・満洲国における高等教育機関に関する第一次史料の分析に重点を置くが、各同窓会の会誌についても考察を試みる。同窓生の経験について研究を進める際、一部の卒業生の日記、回想録、会報などの関連史料についても分析する。本稿では、文献研究の方法を使用して日本戦後同窓会が出版した同窓会資料を収集・整理し、旧満洲日系高等教育機関の戦後同窓会の歴史を叙述する。これに基づいて、中国、韓国、台湾の同窓会回想文集と関連資料を比較し、上に述べた様々な歴史と社会学理論を参照して、各国の卒業生の戦後の活動を要約し、個々の同窓生集団の「記憶の場」を考察して、異なる高等教育経験者集団の視座から「満洲記憶」の違いを分析する。

本論文は 3 つの部分に分かれる。第一部は「満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観」と題し、2 つの章で構成されている。第一章では、満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関を紹介し、満洲における教育の歴史を「満鉄時代」と「満洲国時代」の 2 つに分け、高等教育機関の発展について概説する。第二章では、同窓会に関する歴史資料の収集と経験者の回想文集などを検討することにより、満洲国における個々の教育機関の機能、教授陣、生徒の出身地など、各高等教育機関の概要と学校の特徴を分析する。さらに、戦後同窓会の発足、同窓会活動の特徴、同窓生間の交流、同窓会活動の海外への拡大などを考察する。その分析を通じて同窓会の語りと記憶の關係に触れる。

第二部は、建国大学をケースとして取り上げる。なぜなら、第一に、建国大学は満洲国の国策大学として、「五族協和」という国家政策を具現化し、様々な民族の学生が在学しており、

そのことが大学の多様性を明らかに反映していたからである。第二に、建国大学の建学は他の大学より遅く(1937 年)、存在した期間は短いため、卒業生の年齢が満鉄時代・他の満洲国時代の高等教育機関の同窓生に比べて比較的若いという特徴がある。満洲の高等教育機関のなかでは、現在、建国大学に関する関連資料や情報が最も多い。同窓会活動は2010年まで定期的におこなわれており、会報・会誌も2010年まで刊行されていた。第三に、建国大学の同窓生のほぼ半数は中国・朝鮮・台湾・モンゴル・ロシアなど他の国家・地域の出身者であり、「集合的記憶」理論で考察する際個々の集団で分けることができるため、本稿の研究にとって好個の対象であると考えることが出来る。

第三部は本稿の理論考察部分であり、歴史社会学分野の理論を用いて同窓会と同窓生の「満洲記憶」をめぐる相互作用について説明し、植民地教育経験者の異なる歴史認識を分析し、記憶の連続性と多様性を明らかにする。本稿では、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論とピーエル・ノラの「記憶の場」理論に依拠しつつ、「記憶」と「歴史」の対立・統一関係を分析する視座から、同窓会の語りと記憶の再構成を考察する。

第三部に使う歴史社会学理論と分析視座は次のようになる。満洲高等教育機関戦後同窓会の歴史を考察すると、個々の同窓生集団では異なる「満洲記憶」や同窓会全体で共有された「集合的記憶」を確認することが出来る。しかも「満洲記憶」には時代ごとの特殊性により、複雑な状況があったと考えられる。そこで本報告では、「集合的記憶」論と「記憶の場」理論を用いて、中国、日本、台湾、韓国の同窓生の「満洲記憶」を整理・分析し、その複雑な「満洲記憶」の注目すべき点と方向性を考察する。

本稿の分析対象は、「戦後同窓会」及び「同窓会の語りと記憶再構成」である。まず、「集合的記憶」理論は、ある集団への所属は人間の意識によって決まると考えている。集団的持続性、つまりある「共通意識」において、人々は時間に関連する固有の活動形態(伝統、過去の崇拜など)を通じて人間社会の秩序と進歩を刺激する傾向があるとされる。これを「満洲記憶」に適用すれば、同窓会では様々な同窓生たちが自らを代表できる「集団」を形成する傾向があり、同窓会の小さな社会の継続性と変化のために、ある特定の「共通意識」を発展させる。同窓生の活動の内容や形態の変化により、「満洲記憶」が継続的に増殖され、または削除される。このプロセスは、同窓会会報や会誌に発表された中国、台湾、韓国など他の国や地域の同窓生の寄稿や、日本国外の同窓会(数は少ない)の活動、そして海外同窓会から刊行された回想文集に反映されている。

ノラの視点から見ると、人間に「記憶の場」があるのは、記憶を保存するためである。同窓

会は同窓生の「満洲記憶」が発生する場所であり、その意味で「記憶の場」と見なすことができる。日系同窓会は同窓生が記念活動を行う場所として満洲記憶の場と見なすことができる。ノラは、記憶の場の誕生とともに、自然な記憶はもはや存在しないと考える。このため、日本人同窓生が戦後同窓会を作ろうとする行動は、満洲記憶を置く場所を作って守ろうという意識の現れであるとする事が出来る。他方、この記念意識がなければ、記念すべきものが失われると満洲記憶もすぐに公式的な「歴史」により一掃されてしまうことになる。ノラのいう「記憶の場」が人々の信頼する思い出を守る堡塁であるなら、戦後同窓会はまさしく日本人同窓生の「満洲記憶」を守る堡塁である。そのためノラは、特定の「日付」や「記号」を公式的な「記憶の場」として指定することができる一方、記憶を再構成する源泉として使用できることを指摘した。戦後同窓会は、一方で自分たちの「満洲記憶」を遡らせ、「満洲記憶」を生み出す場所を提供するものであり、他方ではその記憶を再構成する源を提供した。同時に、日本、中国、韓国、台湾などからの同窓生たちも、そこで感じた歴史的距離感から、「満洲記憶」についてもう一度振り返ってみる必要があることを自覚した。

結論

- 1、「同窓会」が「満洲経験」の一つの「記憶の場」であったということである。
- 2、同窓会が個々の同窓生集団の満洲経験による「集合的記憶」を形成する条件を与えたことである。
- 3、「集合的記憶」を生み出す集団は、再編成されうる、という事実である。
- 4、同窓会における「集合的記憶」が時代とともに変化したことである。
- 5、同窓会の集合的記憶が特定の社会の集合的意識で「再発見」されることが可能である、ということである。
- 6、「記憶の場」は、ある伝統に生きる個人が所属意識を見いだす事ができる、つまり社会的集団の一員となる可能性を実感できるシステムである、ということである。